

令、学徒動員令、女子勤勞挺身隊とお国のために出て行っており、あとは老人と子供だけの村になりました。でもお国のためだと頑張るしかない、と話し合いました。私は軍需工場で働いているゆえか二度目の召集も無く、昭和二十年八月十五日を迎えました。

工場で「十二時に全員広場に集合せよ」で、夏の暑い日差しの中、ラジオの放送がありました。心静かに聞きました。天皇陛下の玉音放送でした。一瞬目の前が真っ暗になり、私たちは今まで何のために働いてきたのだと思いました。

日本は負けたのだ。神州不滅は嘘だった。

工場は閉鎖になり泉村へ帰りました。なんとかしようと思った矢先に村長に出会いました。私は家が無いので当面借地の一反も借りて自宅を作る心底だったのですが、農地法で他人に土地を貸すと取られてしまうというので、村長に相談しました。村長は農政振興のために全力を尽くしていました。「乙川君、今未墾地開墾法というのがある。それを検討してみよう」と言われて、「君のようにお国のために充分働き、まして

弟さん二人も戦死させた家の人に村としても充分考えて応援します」とのこと。そして即調査していただきましたら、近くの人で部落の東側に十六町歩の未墾地を所有している人がいました。一人三町歩まで所有できるといので、メンバーを組んで未墾地開墾を申請して受理され、現在は二町三反ほどの宅地や田地畑地を活用しています。

苦勞させた妻は先年鬼籍入りし子供三人は親孝行です。今日の平和は、惜しむらくは大東亜戦争で多くの戦死された尊い犠牲の上の平和です。英霊の安らかな眠りを心から念じます。 合掌

北支河北の戦闘

(極) 支那駐屯第一連隊

埼玉県 井上貞夫

私は昭和十五年徴集兵の検査で甲種合格となった。

生家は当時の東京市浅草区(現台東区)浅草馬道にあ

り、羅紗商の長男として生まれた。弟が三人、妹二人で、十二歳の時、家は神田須田町に移転し、東京下町の中央で育った。早稲田実業学校を卒業してから、将來家を継ぐ立場にもあるので家業の手伝いをしていった。既に支那事變の最中であり、世界情勢の中での日本の立場は厳しいものになっていた。親としては、長男が兵隊に入ることは、当然覚悟はしていたろうが、その心況は複雑なものであったと思う。

昭和十五年十二月一日、近隣、親戚、友人の歓呼の聲に送られて近衛兵第二連隊に入営した。本来、近衛兵は天皇陛下、錦旗護衛が任務であると思っただが、即日、支那駐屯第一連隊に転属し、第九中隊（第三大隊）に編入となった。その時は無我夢中であったが、後に聞いた古兵の話では、昭和十二年七月七日、北支、北京郊外蘆溝橋付近で中国軍と戦闘を交えた牟田口廉也連隊長の部隊であるという。いよいよ、我々は戦地要員だと心に決めていた。

隊にいたのは二週間、軍装品を支給された我々の仲間約一千人は、十二月十四日、東京品川駅を出発、十

五日には神戸港出帆というあわたたしさである。我々は支那駐屯第一連隊（極第二九〇二部隊）の十五年次兵と称されたもので、十二月二十二日には河北省灤県唐山駅着、連隊本部で申告し、即日開平教育隊に入った。北支の冬は、日本内地と異なり、厳しい寒さであったことを今でも思い出す。

河北省は北支那の満州寄りの省であり、共産八路军の活動が盛んで、閩東軍と北支軍は度々討伐戦を行っていたと聞いた。特に我々が入隊した昭和十五年後期からは治安が悪く、八路军の河北省東部（冀東という）への侵略は表面化し、情報によれば、昭和十五年四月頃、中共軍の冀東軍区が北支の根拠地となり、軍区司令は李雲長という。

極部隊の第一連隊本部は唐山、第一大隊は豊潤、第二大隊は古治、我が第三大隊は遵化に配置され、灤河以西の敵の進出を抑える任務を持っていた。我々が入隊する前年、共産軍が侵入し、教育中に非常呼集があったという。我々も教育中に河北交通官舎に中隊を分

散し、対戦、警備のため二、三日間宿泊したこともあった。私は一応学校で軍事教育を受けていたから基本的なことは身につけていたが、未教育兵である多くの仲間には、北支に着くや否や、敵と対峙したのであるから緊張度は高かったであろう。一期の教育は三カ月間、検閲は昭和十六年三月三十一日であったと記憶している。

私の所属する第三大隊本部は遵化、我が第九中隊は鉄廠鎮という所であった。そこは豊・遵・遷三県の県境で、山岳地帯の中央にあり、周辺の山脈は遠くは熱河省の山に連なり、付近一帯は共産八路軍の冀（河北省）東地区前進根拠地帯と目されていた所である。極部隊が移駐した日から付近に出没する八路軍の討伐に落ち着く暇もなかった。であるから、我々初年兵は、実戦をしつつ軍隊の教育を受けた、実戦教育で育ったのである。

しかも、第九中隊には、昭和十三年末の武漢三鎮（漢口・武昌・漢陽）攻略戦に参戦した昭和十二年入隊の第十二年次兵が、中隊本部のほかに四十人ぐらい

いて、別名「焼酎小隊」と呼ばれるくらい毎日焼酎（チャンチュウ）を飲んでいた。二、三年兵はそこには近付けないので、その古参兵の世話は我々初年兵だけに命ぜられていた。随分気を使いながらの世話であったが、昭和十六年四月二十五日、内地に帰還をした。

また、第九中隊は、牟田口連隊の時、蘆溝橋で直接中国軍と戦った中隊であり、長沢准尉はその時戦闘に参加した古参准尉である。そのような関係から、歴戦の誇りを持ち、従って、訓練も内務班での教育もやかましいものであった。

鉄廠鎮付近は八路軍の巢窟といわれる所で、中隊の柱に青竜刀の切り痕や、弾痕などが残っていて、彼等が隊内まで侵入した証拠であった。私が入ってから、一期検閲が終わった翌月頃から敵の夜襲のため非常呼集があったが、私にとっては初めての体験で緊張した。今までは銃声を聞いたり、他隊への襲撃であったが、チェッコ機銃が隊へ撃ち込まれたのは初めてであ

った。しかし、その時は被害は無かった。

古参兵は平気な顔をして「これが日常茶飯事だから、心得ておけ」と言っていた。二、三日毎に撃ち込まれる、時には毎日襲撃される。敵の攻撃の間隙を縫って討伐に行くが、こちらの兵力が少なく、手薄となった留守部隊がやられるので、しょっちゅうは討伐に出ることが出来なかった。八路軍は、こちらが多ければ逃げる。しかし、兵力が少ないと見ると襲撃する。神出鬼没の行動をするから油断は出来ないのである。

初年兵は辛いものだが、とくに恐ろしいのは戦闘よりも、中隊の望樓に立哨（警戒のため歩哨に立つ）することである。望樓の階段を上って行くのは死刑囚のようである。古参兵は交替時間が来ても交替してくれぬから、初年兵は二時間でも三時間でも立哨し続けなければならぬ。分哨は一個分隊だから十人余で、共産軍が望樓目がけて時々撃ってくる。彼等はどこに隠れているか、こちらからは判らない。立哨者が狙われるのだから肝を冷やすというより危険この上ない。時には戦死、戦傷者も出る。姿の見えぬ敵との対決であ

る、普通の戦闘の撃ち合いより不気味である。この不安は体験者でなければ判らぬであろう。しかも、分哨は小人数、警戒を厳重にしなければ、全員戦死という例も度々あるのだから、立哨者の任務は重いのである。

初年兵時代の辛い思い出は、生命に別状ない内務班のことである。先程言った「焼酎小隊の猛者」は内地へ帰ったが今度は二、三年兵との関係と、初年兵の仕事のことである。私等は内地での日常は電灯の下での生活であったが、戦地ではランプ生活である。そのランプの火屋ほやを磨くのは初年兵である。私もランプを知らなかったが、火屋は硝子で出来ている。磨けと言われ、煤を落とそうと強く磨くと硝子だから直ぐ割れてしまう。弱くこすれば煤は落ちない。割って怒鳴られ、綺麗に透明にしなければドヤされる。今の人には想像出来ない辛い初年兵時代であり、時々あの苦勞を戦友と語り合うのも懐かしい思い出である。

私が体験した一番初めのショックは、忘れもしない

昭和十六年五月八日、私は幹部候補生に落ちたが、同室の甲種幹部候補生の金子保君が、北支大官屯の戦闘で頭部貫通銃創で戦死したことである。これが同年兵にとって最初の犠牲者なので、いよいよ戦闘に入ったなと実感させられた。幹部候補生に合格したばかりだったので上等兵であった。

五月二十六日から七月二十日までが、北支派遣軍の冀東作戦である。冀東地区の住民は、元來、満州と中国との双方から影響を受け、その動向には強い親日と反日感情が交錯していると聞いた。農業が主であるが、万里の長城線の山岳地に近づくに従い荒地が多く、農民の生活は豊かではなかったという。これに対し天津市周辺の住民は経済力に恵まれ、部隊本部のある唐山付近の住民は開滦炭砒などに生活の根拠を持って、山岳地付近の住民より豊かであった。その差異に共産党、八路军が力を浸透していったらしい。

従ってこの地区の剿共戦（対共産軍戦）は、従来から関東軍と北支軍が協力してしばしば実施していて、二月～三月にかけ、関東軍の在熱河省部隊と北支軍の

一部（独立混成第十五旅団）が肅正作戦をしていた。我々が部隊へ入った頃であろう。この頃から共産軍は住民と同様の便衣を携行するようになり、軍と民の区別が困難になり、その討伐も成果を挙げにくくなったとのことである。

資料によると、冀東作戦は、我々の師団、第二十七師団、独混第十五旅団の各主力と、関東軍独立守備歩兵第一、第七、第九、第十六、第二十七大隊が参加し、華北政務委員会の治安軍の一部も出動した。五月二十九日、盤山地区根拠地を四囲から包囲攻撃し、爾後、蘇東東南地区を分散退避した敵部隊を急追するとともに便衣化した敵の摘出に努めた。

作戦は七月二十一日おおむね終了した。私等はこの本格的な作戦に初年兵（一期検閲終了一カ月）として参加した。いわば初陣であり、作戦の辛さ、敵しさを知ったのである。北支の夏の行軍も体験し、軍隊は、射撃、剣術、行軍というが、やはり戦地では行軍に耐える体力気力が第一だと痛感したのである。

私の受けた次のショックは、九月十二日、新店子で第九中隊の分屯隊が八路軍の襲撃を受け、戦死六人、負傷者多数を出したことである。その非常呼集があり、私も出陣した。ところが遵化県（第三大隊本部処在地）の城壁を出た途端、待ち伏せしていた敵が、自動車（第一車輛）を目掛けて、チェッコ機銃の一斉射撃を浴びてきた。遮蔽物はなし、先頭車がやられたのだから自動車は出られない。至近弾が飛んでくるので、その時、私は戦死するかと思った。我が軍が擲弾筒を撃ったので敵はチェッコ機銃を置いたまま逃走し、ことなきを得た。

しかし、分屯隊へ着いたら、松本軍曹、幹部候補生の軍曹以下、隊員十数人がいない。その後捜索して、ほとんどの死体を発見したが非情にも全裸にされていた。戦死は松本軍曹、乙種幹部候補生出身の軍曹、三年兵の一等兵など六人であった。他は望楼の中で初年兵を含めて負傷し倒れていた。この死体捜索や、負傷者収容は中隊全員で夕方までかかった。

私達初年兵は入隊以来十カ月で、初めて戦死者の屍しかばね衛兵についた。無残に殺された先輩を守りながらの衛兵は、着剣していてもいやなものである。入隊してから初めての大きなショックであり、今、思い出しでも痛ましい、口惜しい、嫌な体験であった。

警備や討伐は九月以降も続いた。普察冀辺肅正作戦では共產軍を掃討し、我が師団は支那駐屯軍時代からこの地域に駐屯し、作戦地域の状況を知っているので、比較的成果をあげることが出来たと上官が言われたのを聞いたことがある。

私は十二月一日付で第一選抜の上等兵に進級し、昭和十六年十二月一日入営の初年兵を同月二十八日に迎え、我々と同じ開平教育隊で教育することになったが、二年兵の上等兵の私が、三年兵の兵長と共に教育助手を命ぜられた。今まで教わる身が教える立場となったわけである。助教や助手が初年兵の行動を見ているので、嘘はつけぬものだと、初年兵当時のことを思い出した。助手ともなると、班内外の古参兵と初年兵との間に立って苦しい立場に立たされることが多かつ

たのだが、この時期から、私的制裁がやかましく禁止されるようになった。そのため、かつての陰湿な内務班の空気は概ね改善されたので、新人の助手としては幾分救われた。

教育の仕方でも戦地であるから内地の教育とは少し違ったが、自分としては良い経験を積ませてもらったと思う。初年兵の一期の検閲も無事済ませ中隊へ帰ると思つたら、乾第三大隊長の三浦副官から大隊の給与係を命ぜられた。大隊は連隊本部から離れ独立している上に、主計少尉不在、給与係軍曹も不在というので、二年兵の私が責任者となり肩の荷が重いことをつくづく感じた。

食料係となると、十日間毎の献立表を作る。量、栄養、兵の嗜好、健康を考えるだけで大変である。なにしろ未経験であるし、副官から裁可を頂かねばならない。炊事というと、軍隊経験者は解ると思うがいわゆる「各隊のタマ」と呼ばれる折り紙つきの古兵の集合体であり、一人一人が一国の城主のような者を、若い未経験者の私が束ねねばならない。「飯上げ」や「食

缶返納」に來た初年兵が、炊事の猛者共にドヤされている声が聞こえる。

昭和十七年四月から九月五日までは、冀東道肅止作戦（河北省内共産軍根拠地と地下組織肅正）であるが、そのうち四月五日〜六月八日までが魯家峪付近の洞窟剔扶てきぶという作戦である。今度は作戦中の大隊の食料並びに出先中隊の食料も自分で計算し、副官の許可を得て更に作戦に支障のないように輸送しなければならぬ。

作戦間の食料、米、味噌、醬油、甘味品までも馬車（自動車ではない）で運搬する。その車輛は二十台と見込まれた。そのため多くの中国人を使うので、日本語の判るジャングイと呼ばれる顔役も必要だし、手元に置く小回りのきくコックの様な者も必要で、その人選、人集めも一仕事である。

人夫をようやくかき集めたが、馬車も前もって密かにあちこちに分散しておかねば作戦の企図が敵に漏れてしまう。驢馬も前もって徵発しておかねばならな

い。私は支那馬に乗って指示して歩かねばならない。

慣れぬ私にとつては、まったく泣きたいような思いの連続であった。この輸送、補給こそは実に作戦遂行の要なのであるが、若い不慣れな私がやらねばならなかったのが当時の実情であった。

馬に食べさせる馬糧を買って準備しろという。ところがその時期は高粱は未だ実っていないから、顔役のジャングイ等を使って早刈りさせなければならぬ。

次に山路を登るとなると車は使えないから驢馬の背に荷物を付ける。樽も米も味噌も皆駄載である。二十車輻の分量では予め用意しておいた驢馬一〇〇頭に積み替えねばならぬ。

帰り途になると二〇頭の馬車も、十五輻に減っていくが山路で驢馬はいない。しかたなく樽物や乾燥物などは捨てて行かねばならない。作戦を終え帰路、あちらこちらにせつかく苦心して運んだものが山路や公路に捨ててある。担当者の自分としては目を覆いたくなく辛い思いであった。

八月中旬、新軍屯付近の戦闘に参加した。「敵出現」

の報により、連隊は四方からこれを包囲撃滅しようとして意図したが敵兵を見なかった。しかし、敵は豊玉県境を北上すると判断し、我が第三大隊は北進を開始、敵主力の移動中を発見、迂回して進路を遮断する。連隊は包囲態勢をとり一斉に猛攻しこれを殲滅した。砲戦の後には雨が降ると言われるが、やはり天空に刺激を与えるると雨になった。

この大戦果の跡を、私は大隊長、副官のお伴として見たが、敵兵の死骸は累々として重なり、包囲殲滅の様子はまさに見るに忍びなかった。捕獲した銃器も多くなり、その後付近を討伐してこの作戦は一応終結をみたのであろう。

私はまたまた、第十七次補充兵の初年兵教育の助手を命ぜられた。約八〇〇人の初年兵は昭和十八年二月一日、河北省冀県唐山の本部に入隊をした。その頃、中隊の熊沢東作中尉が遷安県泰家路付近の戦闘で戦死された。当時の河北省東部、冀東地区は前年初頭からの肅正討伐と遮断壕の構築、無任地帯の設定等により

一応治安は良くなったのである。

しかし、敵は執拗に我が警備の間隙を縫って共産党の地下工作を続行したり、小部隊により各地を遊動し、我が軍の兵力の少ない際に交戦、我が連隊の各隊は肅止討伐を続けていた。そのため私には暇なく、出動、討伐の連続と、作戦参加の記憶が残っている。

教育助手を毎年命ぜられた私は、昭和十七年八月十二日、昭和十八年度第一次採用幹部候補生教育隊で、教官中西中尉の下で教育助手を命ぜられ、将来の第一線将校の卵の面倒を見ていた。

昭和十八年六月十七日、大陸命第八〇三号により、第二十七師団は関東軍に編入、満州への移動が始まった。第十五師団（祭兵団）はビルマの第十五軍隷下に編入され、いよいよ、ビルマではインパール作戦。満州では対ソ戦に備えて、満支国境を固めるため、我が極兵団が関東軍に編入された。

同年十二月十日まで我が部隊は錦州の西部付近の警備となったが、関東軍の精銳は次々と南方軍へと移っ

ていたのであろう。我々はソ戦軍のトーチカを攻撃するといふ、これまでとは違った教育訓練が厳しく行われていった。関東軍へ移駐したので、通称号も「極第二九〇二部隊」から「満州第二九〇二部隊」と改称された。

足掛け六年間の冀東地区での連続討伐と、移駐準備の過労、移動後の食事の変化、日常生活の変化のためか、赤痢患者が各隊に多発し、連隊の三分の一の兵員が病人となったので、近くにある錦西陸軍病院は入院患者で満員状態となり、中には戦病死した者もあった。その間にも、我々は訓練と警備を続行し、特に師団の連合演習にも各部隊は参加し、来るべき戦いに備えていたのである。

昭和十八年十月二十七日、昭和十四年十二月入隊以来冀東警備に任じ、各隊の中堅として活躍していた我々の一年先輩の十四年次兵が内地帰還となった。これまで、年々補充兵が入隊し兵員も充実しており、私も十一月五日付で下士官勤務を命ぜられた。

ところが、先輩の第十四次兵を内地帰還させた翌十二月、今度は予想もしない我々第十五次兵の内地帰還の命令が出た。帰還した隊は、千葉県佐倉の本部六十四部隊（当時の近衛歩兵第五連隊留守隊）であった。ところが、残った隊員は、湘桂作戦、南部粵漢打通作戦に参加し、我が支那駐屯第一連隊の戦没者数は二、六二五柱、我が第九中隊一三三柱で、昭和十九年以降（私が帰った後）の戦没者は一〇六柱であるという。年次からみると第十六年次（大正十年生まれ）以降の方と、高年齢の補充兵の方々が当然多いのである。

帰国後の私は、家業が平和産業の洋服生地のお店で営業は閉鎖状態にあるため、大日本機械（軍需工場）に入社。昭和十九年十一月東部第三部隊に防衛召集になり、帝都空襲時芝増上寺前の「女子会館」を本部として警備にあたったのである。

我々の部隊は、埼玉県鴻巣市の常勝寺あのみに歩観音像と軍馬の像を慰霊碑とし、戦友相集い戦没者のご冥福をお祈りしている。

想えば、私は北支で苦勞の連続であったが、湘桂作戦前の帰還であり、また幸か不幸か、幹部候補生になれなかったが、もし幹部候補生に合格し小・中隊長をしていたら、恐らく戦死か戦傷したであろう。ここにも軍隊は運隊であったことを痛感し、連隊の毎年挙行する靖国神社での慰霊祭に参加を心がけている。

勝部隊機関銃隊

山西・八路軍と戦う

山形県 山口 一郎

大正十年二月六日生まれ、昭和十六年徴集兵として、昭和十六年七月に徴兵検査を受けましたが、第一乙種が多かった中で私は甲種合格となりました。当時家は農業でしたので、長男である私は当然父の手伝いをしていました。弟三人、妹三人に後を頼んで、昭和十七年二月、一緒に検査を受けたのは十人であったのに、私一人だけが盛岡の北部第六十二部隊に入営とい